

ころね 豊岡図書館

みち 第226号

2017.11.22

2年
図書委員
北村 善樹 編集
坂下 遼太郎 編集
橋本 隼弥 編集
神原 聖生 編集
古屋 理恵子 編集

小春日和



今月の花
山茶花
ツバキの仲間。
今校内にも咲いている。
花びらは一枚ずりずり、
落ちる。ほんの甘い色り
が印象的。
花言葉は謙譲。

ことわざ歳時記
柿が赤くなると医者が青くなる
・柿も赤くなって食欲が戻る秋、
体調も良くなり、医者に訪れる人が
少なくなるから

季節の変わり目です

朝には深い霧が立ちこめて、身を切る
ような寒さを感じる季節になりました。
学校行事のマラソン大会も終わり、
来月の頭には四定を控えています。また
近々、雪が降るといふ予報がでている
ようです。みなさん、マフラーや手袋
など防寒対策をして、より一層体調管理
に努めていきましょう。

霜月

豊岡市展

書道の部
商工会議所会頭賞

◎小山 実紗 さん(3-1)

満足に時間をとれない中の作品製作
でしたが、今回このような賞をいただけ
たことを嬉しく思っています。三年間
書き続けてきた「行草」という書体で、
最後に良い結果が出てよかったです。



- 特選
入選
- 織田 佑香 (2-2)
 - 上田 夏実 (2-3)
 - 小林 美緒 (3-1)
 - 清水 菜摘 (2-4)
 - 藤原 さくら (1-4)
 - 村尾 侑成 (1-3)
 - 山本 佳愛 (1-3)

絵画の部

入選 柴垣 遼太郎 (1-1)

→普段の練習成果が表れましたね。
後世の作品は書道教室前に展示し
あります。是非ご覧下さい。

最後まであきらめず

→昨年のマラソン大会から熱射病を患念して
11月に変更になりましたが、天気が不安定で
これもまた大変でした。
スタート時、私は前の方にいましたが、前の
人についていくので精一杯でした。途中、不安
定な雨が止みなんと目標にしていた順位より
高くとても嬉しかったです。何事もあきらめずがんばることが大切だと改めて感じました。



家族に一言を

わかれどきばあー

神奈川県座間市で想像を越える残酷な事件。
SNSで自殺願望者を狙い、縁に死にますかとの
書き込み。女性達は引き込まれて行ったり。
その中に高校生も含まれており、私は目や耳を
疑うほどショックでした。
白石容疑者は被害者のことを自殺する気は全
くなかった。寂しかった。話を聞いて欲しかったと供述。
被害者の中には家出や引きこもりの人もいた。家族が
こんな大それたことを家族に言えなかった。家庭内
暴力もあろう。しかし、
家族が見抜けなかったサイン。見ようとならないサイン。
どうしようもなかったのか。難しい。
家族間での日常の挨拶や、声かけ、連絡。そして
家におぼろげなサインという優しいサインがあったなら
話したかも知れない。
本日は家庭が一番の平住の地だと思ふのだが、
彼等たちの求める話し相手や完全に関与はなかった。
以前に「赤い糸」は世の中の大変さを知っている。
「オヤジ」と産声も上げる「と耳にしたことがある。
死にたいなんて簡単に口に出さないうと、
皆それだけ自分にとって問題を抱えている。
この事件を他人ごとと思わないで自分ごととして
考えて欲しい。
死ぬ勇気があるなら
自分の人生を生きていこうと想う。

家庭こそが
安住の地でありたい

新着図書

① いっぴーボイス健康法

(坪内 美樹)
書籍編集者やTVリポター
などの仕事を経験し、現在
コミュニケーション講師など
している著者がコミュニケーション法を
伝授。

①、③は
卒業生(著者)からの
寄贈本です。

② 本日はお日柄もよく

(原田 マイ)
人の心に寄り添う優しさ
にあふれた作品です。

③ この国で自死と向き合う

(藤原 鋭一)
八千人の自死志願を救った
「おせかい和尚」こと筆者の藤原さん。
起しめや絶望の底にある人々を
どのように救ったのか感動間違い
なしの実話です。

裏面もあります。



読書感想文青少年但馬大会

特選

題「ツナグ」を読んで

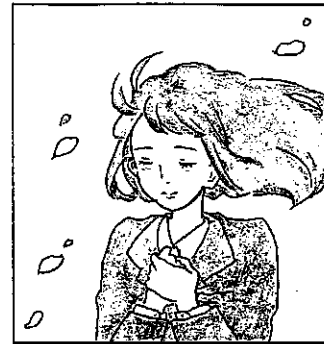
菅村真里（2-1）

一生に一度だけ、死者との再会をかなえてくれる使者。その使者の青年は依頼を引き受けるなかで、さまざまな人の思いに触れていく。生きる者と死んだ者をつなぐ役目の意味とは何か。その邂逅に立ち会うことで、迷い、戸惑い、葛藤する日々の中で青年が成長していく姿がこの本には描かれている。

私がこの本の中で最も印象に残ったのは、「親友の心得」という二人の女子高生の話だ。この話は、嵐美佐が自分のしたことのせいで死なせてしまった親友、御園奈津に謝るため、使者に依頼をして再会を果たすというものがある。嵐は再会してもなお、御園に自分の行為を謝罪することができなかった。再会の時間が終わり、言い出せなかったことを深く後悔し、泣き崩れる嵐の姿が私の心に突き刺さった。死んだ御園に謝罪できるたった一つのチャンスであったのに、それを伝えようとしてツナいでもらったのに、伝えなければならぬことを言い出す勇気がなかった。嵐は一生、その後悔を背負って生きていくのだろうか。私はどうだろうか。大切な人にもう二度と会えなくなったとき、後悔しないだろうか。浮かびあがったその問いに、私ははっきりと頷くことはできなかった。面倒くさいからあとでいいや、伝えたところで意味が無いだろう。そんな理由をつけて、ことばを飲み込み、後回しにしてきた自分がいた。伝えられるときに伝えなければ、いつか必ず後悔する時がくる。それはきっとじぶんにとってだけでなく、相手にとっても悲しいことだ。この話を読んで、私は想いを伝えることの大切さに気づかされた。

この本の裏表紙にある一文がある。「一生に一度だけ、死者との再会をかなえてくれる使者。」この一文に惹かれて私はこの本を手にとったと言っても過言ではない。この本を読み終えたとき、私は誰を思い浮かべるだろう、そう思ったのである。読み終えた私が思い浮かべたのは祖母であった。私が小学生の頃に亡くなった祖母に会いたい。幼いときから人見知りだった私は、なかなか祖母とも話すことができなかった。祖母には悲しい思いをさせてしまったのではないかと、今でも思うときがある。もし、もう一度逢えたなら、私の成長した姿を見せ、あの頃話せなかった分までいろいろなことを話したい。そして、祖母のあの柔らかな笑顔をもう一度見たい。

使者は死者との再会をかなえてくれる。そんな使者にどんな思いから依頼



をするのだろうか。依頼者の多くは、私のように純粋にもう一度会いたい、話したい、そんな思いから再会を望むのだろう。しかし、中には死者への想いが温もりや愛情だけでなく人もいる。死者に対する憎しみや後悔、懺悔したい気持ちなどである。このような依頼者は、今でも心を死者に囚われ続けており、すでに死者と繋がってしまっていると言えるかもしれない。使者の役目の真の意味とは、依頼者と使者を「ツナグ」だけではなく、同時に双方を「切り離す」ことなのではないだろうか。依頼者と使者

を再会させ、もう一度話し合う場を設けることで、死者への想いや過去に捕らわれている鎖を断ち切り、前へ進ませるものだと感じた。死者と負の感情でつながっている依頼者は、無意識のうちにそれを望みながら依頼をするのかもしれない。

この本を読んで、私は人と人の思いが交差する瞬間を目の当たりにした気がする。それは、愛情であったり、後悔であったり、幸せであったり、悲しみであったり、複雑に絡み合った感情がそこにあった。使者の役目を祖母から継承した青年は、人と人の思いを「ツナ」ぎ、立ち会うことで成長していった。

「人とつながる」とは一体どういうことなのだろうか。おそらく人と人が「信頼関係」で結ばれることを指すのだろう。それは互いの「ありのまま」を受け入れ、その人の存在そのものを大切にすることなのか。しかし、この本を読んで、痛感したのは、家族でさえ、いやむしろ愛している人だからこそ、心の底から信じていることができないのではないかということだ。

本の中でも、死者との再会を望みながらも、死者もまた生者と会えるのがたった一度きりであるため、なぜ自分との再会を受け入れたのかを悩む場面が出てくる。「自分のことを本当はどう思っていたのか。」「自分は相手にとって見下されていた、もしくは都合のいい人間ではなかったか。」そんな疑問を持ちつつも、その根底には「自分のことを認めて欲しい、受け入れて欲しい、愛して欲しい」という切実な想いが満ちている。私たちは死者と再会することはできない。だからこそ、生きている生身の人間同士、互いの思いを「ツナグ」努力をしていかなければならない。そのためには私は、受け入れられないことを恐れない強い人間になりたい。そして、相手を信じ、自分の想いを「ことば」にして伝え続けたい。

(画 菅村真里)